

Graham, H. and E. McDermott, 2006, "Qualitative research and the evidence base of policy: Insights from studies of teenage mothers in the UK," *Journal of Social Policy*, 35(1): 21-37.

(ヒラリー・グラハム/エリザベス・マクダーマツ 「質的研究と政策のエビデンスの基盤——イギリスにおける 10 代の母親の調査からの知見」『社会政策雑誌』 35(1): 21-37.)

イントロダクション (pp21-23)

- 質的研究は、政策のエビデンスの源としてあいまいな位置にある。
 - 質的調査は、エビデンスレビュー（=類似の政策やプロジェクトに関する既存のエビデンスの要約）や政策形成から決まって除外される一方、政策形成において利用者の声が重視されるようになるなかで質的調査の地位が上昇。
- 質的研究のコミュニティでは、質的研究の知見を政策のエビデンスの基盤（evidence base of policy）に加えるための道具として、とくに系統的レビュー（systematic review）が注目されてきた。本稿では、系統的レビューをつうじてマッピングされ統合された質的研究が、政策のためのエビデンスの基盤にどのように貢献しうるのかを探る。
 - 事例とするのは、イギリスにおける 10 代の母親たちの生活についての質的調査。

イングランドにおける 10 代妊娠戦略 (pp23-24)

- 1999 年、イングランドにおいて 10 代妊娠戦略（Teenage Pregnancy Strategy）が開始。
 - 10 代の妊娠率を減少させ、より多くの 10 代の親を教育訓練や雇用につなげることが目的。相談窓口や避妊のためのサービスへのアクセス向上のほか、情緒的な援助や福祉サービスへの接続をテラーメイドで行う事業などを実施。
 - しかし、その有効性についての系統的なエビデンスは示されていない。代わりに、観察調査にもとづく定量的なエビデンスに大きく依拠する。

10 代の母親についての定量的エビデンス (pp24-26)

- 量的調査は、現代において 10 代の母親になることを、若者における成人期への早いコース/遅いコースの出現というナラティブに位置づける。
 - 1960 年代以降、若者の成人期への移行のあり方が変化し、「成人期に向かう遅いコース/早いコースにある者のあいだの差の拡大」をもたらしていることが量的分析によって把握される。
 - 「遅いコース」：高い社会経済的地位の親のもとに生まれ、フルタイムの仕事に参入するための資格を得るために長期間教育を受け、訓練が完了してキャリアが確立するまで結婚を先延ばしにする。

- 「早いコース」：生き立ちが貧しく、学校から仕事への移行が直線的に進まず、低賃金の仕事を渡り歩く。このような経路は社会的排除につながるとされる。とくに、早期に母親になることは、すでに不利な立場に置かれた者の就業の可能性をさらに縮小させることで、世代間での社会的排除の伝達をもたらすとされる。
- 量的調査のエビデンスを要約して、10代の母親が社会的排除の問題を縮図的に示していると結論づける論者も。
 - しかし、このような結論は、中間層の若者によく見られる移行のあり方を物差しとし、それとは別の移行のあり方を評価しているとして批判される。このような規範的立場をとることは、若者たちにはみずからの「失敗した」移行に責任があるとみなしたり、早期に母親となる若者によって肯定される価値やアイデンティティを正しく理解することを困難にしたりすると指摘される。

10代の母親についての定性的エビデンス（pp26-27）

- 若者の価値やアイデンティティに関心を寄せる質的研究は、社会経済的な不利が若年女性の生活や人生設計におよぼす影響を記録すると同時に、女性たちがそうした不利に抗して、自身にとって価値あるアイデンティティを守ろうとするやり方を強調する。
 - たとえば調査の参加者たちは、自尊心を得られるより確かな機会として、母親であるということを中心にみずからの未来を設定している。
- 質的調査は、個々の研究ごとに成人期への「早いコース」について重要な見方を提示している。しかし、これらの見方は、社会的包摂を促進する施策に影響をおよぼすエビデンスレビューにおいて重視されていない。
 - 系統的レビューの取り組みは、質的調査が政策のエビデンスの基盤に加わるための手段を提供しうる。以下では、1990～2003年に出版されたイギリスにおける質的調査を対象として、20歳未満の母親の経験についての系統的レビューを行う。

10代の母親たちの生活経験：質的統合（pp27-30）

- 系統的レビュー¹の標準的なステップ：
 - 1) 初期段階の検討をつうじて設定した検索語による文献検索
 - 2) 検索をつうじて発見した研究に対する選択基準／除外基準の適用
 - 3) 選択基準を満たした研究の質評価
 - 4) 質評価をクリアした研究で得られた知見の統合

¹ 系統的レビュー（systematic review）とは、一般に、あらかじめ特定され焦点化された問いに対し、系統立てられた手順に沿って対象とする研究を同定・選択・評価し、それらの知見を統合する方法のことを指す。

- 1 と 2 のステップについては、量的研究の系統的レビューで使用されてきた方法論を適用。3 と 4 のステップについては、質的研究の統合のために発展してきた技法を利用。
 - 3 の質評価の基準：調査の文脈や、サンプルの選択およびその特徴，データ収集と分析の方法を明確に記述しているか，分析の妥当性と信頼性を評価するためのエビデンスを示しているか，オリジナルなデータを十分に含んでいるかなど²。
 - 4 の知見の統合にあたっては、「メタ・エスノグラフィー」と呼ばれる手続きに基づき，各調査の著者がデータをもとに導出した知見を統合。
- 個々の調査におけるデータの解釈を連結・包含し，10 代の母親の生活についての理解を導く概念として，「制約要因」および「レジリエントな母親としての実践（resilient mothering practices）」という 2 つの概念を構成。
 - 「制約要因」：10 代の母親たちは，量的調査において詳らかにされてきた物質的不利に直面しているだけでなく，みずからを残余的かつスティグマ化された位置にあると見なしていることを指摘。
 - 「レジリエントな母親としての実践」：若い母親たちは，母親として成功するために必要な（情緒的，実践的，物質的な）資源を探し求めており，こうした実践の核には，みずからに母親としての道徳的価値があるという信念があると指摘。母親としてのアイデンティティに傾倒することは，自尊心に対する潜在的な脅威への緩衝材となっている。また，賃労働に従事することは，母親たちの自己意識にとってより根本的なケアの実践を危険に晒すと考えられている。なお，物質的または言説的に不利な位置にある若い女性たちの母親としての実践は，親族とくに女性たちの母親による援助をつうじて可能になっている。

質的レビュー：政策（批判）の資源（pp30-34）

- 上述した質的な統合が社会的排除への取り組みに関して新たに提示する 2 つの論点：
 - レジリエンスの発展：
 - 本稿における質的な統合は，レジリエンス（＝逆境に積極的に対応する個人の強みや能力）がいかにして形成されるのかを明らかにしている。
 - 本稿のレビューは，量的調査で明らかにされてきたレジリエンスを保護する諸要因と類似したものを，異なるデータに基づいて明らかにした。同時に，イギリスで施行されるプログラムのなかで 10 代の母親たちに 1 対 1 で対応する支援者が，レジリエンスを保護する重要な要因となる可能性があることを示唆する。

² 質的研究の質を評価する基準として，ここではロンドン大学教育研究所が設置する「エビデンスによる政策と実践のための情報連携センター」（Evidence for Policy and Practice Information and Cooperation Centre）が開発したものが用いられている。具体的には，以下の文献が参照される。

Rees, R., Harden, A., Shepherd, J., Brunton, G., Oliver, S. and Oakley, A., 2001, "Young people and physical activity: a systematic review of research on barriers and facilitators," EPPI-Centre, Institute of Education, London.

- 社会的排除／包摂のダイナミクス：
 - イギリスにおける政策言説には、早期に母親となることが社会的排除をもたらす問題含みなものであるという前提がある。本稿のレビューは、10代の母親たちが、量的調査によって記述された不利をたしかに経験しているものの、母親であることをみずからのアイデンティティとし、そのアイデンティティを維持するために原家族（とくに自身の母親）に頼ることで、そうした不利に対応しようとしていることを示した。この意味で、10代で母親になることは、社会的排除の過程で形成されたものであるとはいえ、社会参加の1つのあり方であるということを示している。
 - これは、社会的排除／包摂が二元的なものでなく、交差していることを示している。量的分析において社会的排除につながるルートとみなされたものは、本稿で試みた質的な統合をつうじて、社会的包摂への経路として立ち現れる。
- こうした社会的排除／包摂の動的な関係についての理解は、2つの道筋で政策的議論に接続される。
 - （既存の）社会的排除をめぐる言説は、労働市場におけるアイデンティティや関係性を特権化している。本稿では、多くの若い労働者階級の女性にとって、賃労働者としてのアイデンティティや労働市場における関係性よりも、無償のケアラーとしてのアイデンティティや母子関係が重大であることを示した。
 - 市場を基盤としない社会的包摂への経路を阻むような排除の過程を浮き彫りにしている。本稿ではそうした排除として、物質的不利と社会的なスティグマがあることを指摘。

結論（p34）

- 本稿のような単一の系統的レビューから導かれる結論は暫定的なもの。
 - しかし、質的研究の統合は、探索的な事例研究として、量的調査によって捉えられた過程を批判し、再構築する可能性を有していると主張できる。